

昭和萬葉集

卷五

昭和十五年～十六年

講談社

昭和萬葉集 卷五

定価 一、六〇〇円

昭和五十四年六月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 一―二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一二(大代表)

振替 東京八―三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 本州製紙株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九七九年 Printed in Japan



0392-441054-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷五／目次

口絵
凡例

I

太平洋戦争への道

ノモンハンの衝撃

12

南京国民政府

14

ヒトラー

14

パリ陥落

16

欧州を思う

17

日独伊三国同盟

18

独ソ開戦

20

南進日本

21

日米会談

22

日本を憂う

23

紀元二千六百年

新体制運動

27

大政翼賛会

29

紀元二千六百年

30

記念式典の日

32

隣組

34

防空演習

35

燈火管制

38

奢侈禁止令

39

簡素の美

40

国民服令

41

国債

41

貯金

43

軍事インフレ

44

国民学校

44

戦陣訓

46

戦時機構

47

不自由を常と思えば

米の配給

49

節米

51

外米

52

砂糖

54

酒

56

炭

57

マツチ	58
煙草	59
靴	60
純綿	62
釘	63
金属献納	63
代用品時代	65

公定価格	66
闇	66
燃料不足	67
木炭バス	68
行列	69
売り惜しむ	69

戦場へ

徴兵検査	72
今ぞ召されて	73
夫を送る	76
子を送る	79
兄弟を送る	81
友を送る	83
従軍看護婦	85
出征風景	85
馬も犬も	89
戦場への思い	91
夫を思う	91

栄誉の行方

子を思う	93
兄弟を思う	94
夫からの便り	95
兵からの便り	97
戦場を思う	99
慰問袋	101
ニュース・映画	102
戦死の報	103
英霊還る	105
北白川宮を偲ぶ	108
遺品に思う	108
遺家族たち	110

III

軍病院にて

112

傷病者

113

戦盲者

114

帰還兵

115

夫を迎える

118

兵を迎える

119

兵のいる光景

123

市民と兵たち

軍隊生活

127

帰還兵の周辺

軍馬の帰還

123

120

はてなき戦線

祖国をあとに

132

行軍

133

戦場にて

135

歩哨・動哨

140

眠る

141

渡河戦

142

出撃

143

戦闘

144

敵弾

146

突撃

147

敵兵

149

捕虜

151

遺棄死体

152

軍馬

153

軍用鳩

155

従軍記者

156

艦上にて

156

生と死のはざままで

戦陣小閑

157

認識票

159

乏しい糧食

160

名誉の戦死

162

戦傷・病者

164

赤十字の歌

167

戦場の民

168

はるかなる祖国

IV

戦線に想う
望郷

172

171

銃後の日常生活

生活の周辺

戦時色漂う

わびしい暮し

戦時下の日常

長引く戦争

銃後の覚悟

勤労奉仕

愛国少年

子供たち

しのびよる不安

日常折々

家庭菜園

静岡大火

獄中の歌

職域奉公

仕事の歌

201

200

199

198

196

194

190

187

186

184

182

178

ソ満国境にて
大陸の風光

175

174

転業

工場で

商いの歌

少年工・女工員

教師

医師

農村の日々

肥料配給

供出

田・畑

農村の生活

養蚕

漁村で

外地の日々

アメリカで

ブラジルで

大陸の生活

231

231

230

228

228

224

221

220

218

212

218

217

214

209

208

206

212

V

愛と死

父・母

244

父母の死

246

父母を偲ぶ

247

みどりご

247

わが子

250

娘

252

わが子の死

252

妻・夫

254

兄弟・家族

256

土田耕平の死

258

愛の歌

愛

259

結婚

261

病者の歌

病床の日々

262

癩園にて

266

四季のよろこび

春

267

春の花

269

夏

270

虫・蛙

272

秋

274

晩秋

276

時雨

278

冬

279

雪

280

鳥たち

281

四季折々

283

海

285

大陸を思う

239

朝鮮にて

240

台湾・樺太

241

大陸紀行

238

苦力

237

中国の人々

236

開拓者たち

234

山

286

川

288

ふるさと

290

旅

291

都会風景

293

折々の歌

学芸の楽しみ

295

折々の歌

296

新体制の猛威に〈昭和短歌史概論〉

302

青春への出発〈昭和史私論〉——山田宗睦

308

年表

318

作者略歴・索引

321

圖脚注目次

《太平洋戦争への道》			
岐路に立つ日本	12		
ノモンハン事件の衝撃	13		
南京国民政府樹立	14		
汪兆銘	14		
ヒトラー	15		
パリ陥落	16		
ヨーロッパの風雲	18		
松岡外交	19		
独ソ開戦	20		
日ソ中立条約	21		
南進日本	22		
日米交渉	23		
日本を憂う	24		
東条英機内閣	26		
《紀元二千六百年》			
新体制運動	27		
大政翼賛会	28		
「バスに乗りおくれるな」	29		
近衛文磨	30		
紀元二千六百年	32		
隣組	34		
防空演習	35		
燈火管制	38		
七・七禁令	38		
「ぜいたくは敵だ」	39		
簡素の美	40		
国民服	41		
国債・貯蓄	42		
軍需インフレ	44		
国民学校	45		
戦陣訓	46		
戦時機構	48		
《不自由を常と思えば》			
米の配給制	50		
七分搗米	52		
外米	53		
砂糖	54		
酒類	56		
木炭	57		
マッチの配給制	58		
煙草	59		
靴	60		
地下足袋	61		
純綿	62		
釘	63		
金属献納	64		
代用品時代	65		
公定価格	66		
闇	67		
燃料不足	68		
木炭パス	68		
《戦場へ》			
行列	69		
日中戦争の規模	72		
今ぞ召されて	74		
千人針	76		
電報短歌	77		
出征風景	86		
秘密の出征	87		
馬も犬も	89		
《戦場への思い》			
慰問袋	101		
ニュース映画	102		
国民歌謡	103		
《荣誉の行方》			
英霊還る	106		
北白川宮	108		
遺家族	110		
傷病者	112		
《兵のいる光景》			
国内の陸軍部隊の編制改正	126		

《はてなき戦線》	支那派遣軍	長沙作戦	渡河戦	清郷工作	新四軍	八路軍	中原会戦	軍馬	《生じ死のはざまで》	現地調達	《はるかなる祖国》	山西省	《銃後の日常生活》	国防国家	臣道実践	陸軍の用語簡易化	180
八紘一字	スパイ	大東亜新秩序	技術将校	人口調査	シユベール号	生めよふやせよ	源泉徴収	「科学する心」	五・一五事件	奉安殿	興亜記念日	警防団	婦人会	勤勞奉仕	増産報国	海鷲	192
葉隠論語	われら少国民	「のらくろ」の連載中止	企画院	家庭菜園	静岡大火	《職域奉公》	産業報国会	『六月』	軍需産業	統制経済	徴用	《農村の日々》	肥料不足	供出	地下足袋不足	《外地の日々》	192
在米英蘭資産凍結	ブラジル移民	開拓団	青少年義勇軍	大陸の花嫁	苦力	民族の同化	《愛の歌》	冠婚葬祭の簡素化	《病者の歌》	結核対策	《四季のよろこび》	非常時下の旅行	《折々の歌》	『新風十人』			297
230	231	233	234	235	237	240	261	264	291								

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に

つくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の

上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は……で示した。

〔例〕大8：〈生年のみ判明〉

……昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編纂部が典拠としたものを示した。『』は歌集、『』は新聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕『形相』（23）〈昭和二十三年刊〉

「アララギ」（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉

「朝日新聞」（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

〔例〕「アララギ」（17・9、10）〈九月号と十月号〉

「アララギ」（17・9）Ⅱ三首（18・3）Ⅱ二首〈十七年九月号から三

首、十八年三月号から三首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

〔例〕『露原』（22）——食生活〈歌集『露原』にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出〉

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表作の典拠等をへゝ内に記した。

〔例〕〈北支にて〉〈日記より〉

《沖修二『阿南准幾伝』（45）より》

5 作品の表記は、よみがな（ルビ）をふくめて、旧かな使いを原則とした。よみがなは編纂部の判断で、必要に応じて加減した。漢字は新字体使用を原則とした。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（ ）内は執筆者名。

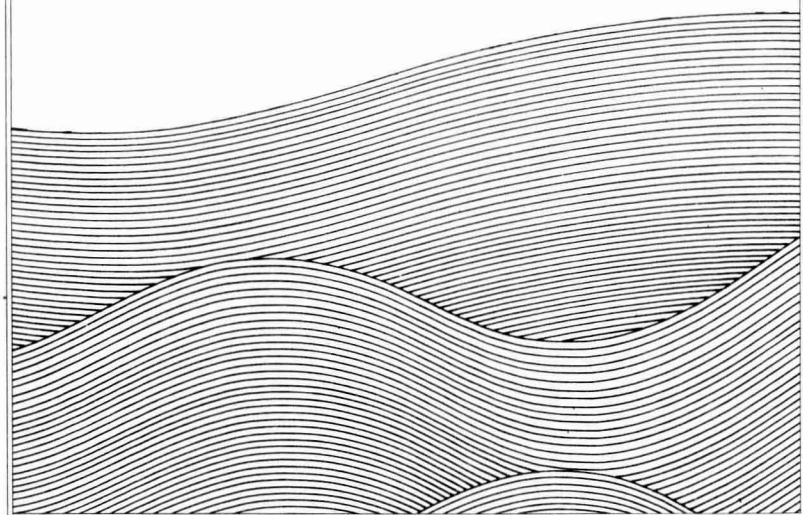
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて〔詞書〕と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、*または**をくりかえし付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者、著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の*印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編纂部まで御一報くださいますようお願いいたします。

I



太平洋戦争への道

波多野土芝 「アララギ」(15・3)

ノモンハンの衝撃

ノモンハン生残りの勇士とわが言へば弟は寂しき笑ひをしたり

町山正利 明32 「アララギ」(16・5)

ノモンハンに君戦へど真相に触るるをさけて多く語らず

小林喜久夫 「アララギ」(15・6)

死傷一万八千と伝ふその中に独りのみ霊いまかへりきぬ

本間竜二郎 明43 「ポトナム」(16・6)

ノモンハンの砂丘を駈けし甥が今暈の上にて静かに語る

暁 夢艸 「アララギ」(15・10)

ノモンハンの戦に右脚失ひし君帰りたりけふぞ相見る*

岡山利一 明36・昭33 「森蔭」(15・1)

大殲滅戦一夏に渉りしノモンハンにこの町よりゆきし兵一人死す

岐路に立つ日本 昭和十五年は、神武天皇紀元二千六百年にあたるというので、「万世一系、八紘一宇」の標語が国中を埋め、十一月十日、東京の宮城前広場では天皇・皇后臨席の下に式典が行われた。国民は戦争を忘れて祭りの気分を楽しむことを許された。日中戦争は三年を経過して、なお解決の見通しがつかず、ますます泥沼状態をつづけ、国民の厭戦気分は強まっていた。この年二月、斎藤隆夫は衆議院で痛烈に軍部を批判、議員を除名された。七月、陸軍はドイツとの提携を拒否する米内光政内閣をたおし、近衛文麿をかつぎ出した。近衛の新体制運動に、政党も労働組合もが「パスに乗りあぐれるな」を合言葉にこれに参加、大政翼賛会は、一国一党を標榜して出発した。九月二十七日、日独伊三国同盟が締結され、日本の進路は決定的となった。そして翌年、政府軍部は目まぐるしく変転する国際情勢の下で、ソ連攻撃の北進か、東南アジア攻撃の南進かの二者択一によって時局を開きしようとした。(原田勝正)

* けふ けふ 今日。

安部正美 明43「アララギ」(15・8)

ノモンハンに闘ひし兵らかへり来て雨ふる中を神社にむかふ

森 幸平 明43「アララギ」(15・10)

ノモンハンに傷つき帰りし友一人肋膜を病み今日逝きにけり*

鈴木靖俊 「アララギ」(16・9)

一本のサイダーに戦車一台賭けしとふノモンハンの戦記に涙流れぬ

松山国義 大3「ポトナム」(15・1)

胸部貫通にて血を吐く友のいやはての声はほそりつつ 天皇陛下万歳**

次々に友死に行けりこの我も遺書したためて何かおちつく

戦車群のあとより攻むる露兵らのウラーと叫ぶがいよよ真近に*

鎌田純一 明43「ポトナム」(15・1)

幾万の精霊が瞼に顔ちかはりホロンバイルは初雪のふる**

ノモンハンの地図しろじろとかきて眼をとちたる我の何をかいはむ

古賀正直 明45「アララギ」(15・5)

ノモンハン事件の衝撃 昭和十四年夏のノモンハン事件は、ソ連・

モンゴル軍の優勢な火力と戦車により、関東軍が大きな打撃をうけた。事件全体を通じて日本軍の死傷・行方不明者は一万九〇〇〇名にのぼり、三三・五割とかつてない死傷率を示した。その中でも、

第六軍の第二師団は損害一万一七〇五名で、七〇割を越え、潰滅状態となった。この事実は、ありのままを国民に知らせることは行なわれなかった。しかし、国民は

帰還兵士などの口からそれとなく事態の重大さを聞きとっていた。「無敵」とされた日本軍が、この

ような大損害を受けた衝撃は極めて大きかった。(原田)

*肋膜を病み(結核等からおこる)肋膜炎になつて。

**いやはて最後。*ウラーばんざい、にあたるロシア語。

**精霊は肉体を離れた魂。瞼に顔ちかはりまぶたの裏に現われては消え。

ホロンバイルは呼倫貝爾。中国、内蒙古自治区を構成する盟であつた。現在は黒龍江省西部、滿州

里、海拉爾市の二市を含む盟。

街辻の歩哨の傍に汪兆銘が絶叫しをるポスター貼りぬ

前野春樹 大10「アララギ」(15・6)

面臥せし汪精衛の或るときの写真の姿まなぶたにあり

草柳繁一 大11「短歌人」(15・7)

南京に新政府確立を寿ぐ時も我は読み書き食ひ眠るべし

築井改造 「日本短歌」(16・11)

赤寺に集ふ華僑の顔晴れて新政権の栄を祝ふ

鈴木茂杜子 「国民文学」(15・9)

食器洗ふ手をばおのづとやめて聴くヒットラーの議会演説録音

宮地節男 「アララギ」(15・11)

オリンピックの写真の中にむずむずして膝擦りあるヒットラーが映りぬ

雨宮熊太郎 明43「アララギ」(15・8)

銭湯の話題をきけばヒットラーを「隣の大將」並に話す

関野直輔 大9「短歌研究」(15・10)

南京国民政府樹立 日中戦争はすでに昭和十三年の漢口攻略以後泥沼状態となっていた。毛沢東は一九三八年、『持久戦論』をあらわし、日本軍との対峙段階を規定した。日本の軍部も、ようやく武力侵攻の限界を意識しはじめた。そして、政治解決をはかろうとし、国民政府から脱出してきていた汪兆銘を抱きこみ、南京に「国民政府」を樹立させ、重慶にある蒋介石の国民政府の正統性を否認する方策を立てた。一九四〇年三月三十日、南京で国民政府遷都式が挙行され、「国民政府」はそれまであった「維新政府」を吸収、汪が主席となり、形はどこのつた。しかし、日本軍の占領体制のもとで独自性をもつことはできず、重慶の国民政府との交渉も実現せず、傀儡的性格をむき出しにしていたのである。(原田)

* 寿ぐ 祝う。

* 赤寺 長崎にある崇福寺の別称。華僑 海外に居留する中国人。

汪兆銘 一八八五—一九四四。字は精衛。辛亥革命後、広東国民政府の要人となった。孫文の死後、国民党右派と対立を深めて下野し